本稿では、クロアチアに関する自分の経験を踏まえながら、クロアチアと EU を自由に語っていくことにする。気軽に読めるエッセイとして読んでいただければと考える。

I クロアチア

クロアチアのことをご存じだろうか。クロアチアは、スロベニア、ハンガリー、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロと国境を接している。クロアチアは、アドリア海に面し、風光明媚であり、観光大国でもある。クロアチアの特産品は、ワイン、トリュフ、ラベンダー、オリーブオイル、チョコレートなどである。私は、おみやげとして、チョコレートとトリュフ入りの塩を購入した。ネクタイは、クロアチア語でクロアタ(Croata)であるが、ネクタイの発祥地はクロアチアである。言語は、クロアチア語である。EU の公式言語は24言語あるが、そのうちの1つがクロアチア語である。英語も通じるが、駅などの売店で売られている新聞はクロアチア語で英語のものを見つけることはできなかった。治安は良く、安心して過ごせる。また、物価も私がよく訪問するドイツよりも安く、首都のザグレブは路面電車とバスが発達しており、生活しやすい感じを受けた。クロアチア人の研究者の話では、クロアチア人はゆったりとしていて、1杯のコーヒーを飲みながら喫茶店で何時間もボーとしていられると言われた。もっとも、私がお世話になった Lang 先生は分単位で動いていると思われるほど、いろんな仕事を並行してされていた。人によるのかもしれない。のちに詳しく述べるが、2回、クロアチアを訪問している。ただ、あわせても2週間強しか滞在していないため、ここで述べることは単なる私の印象にしかすぎず、実際のところは自分の目で確かめてほしい。なお、クロアチアのザグレブには、日本国大使館がおかれている¹。

II クロアチアと EU

EU 加盟国は、イギリスが2020年1月31日に EU を脱退し、現在27か国である。クロアチアは、2013年7月1日に EU (欧州連合) に加入した。それ以降2025年1月17日現在に至るまで最後の EU 加盟国となっている。もちろん、加盟候補国として正式に認められた、9か国 (アルバニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ジョージア、モルドバ、モンテネグロ、北マケドニア、セルビア、トルコ、ウクライナ) が今後 EU に漸次加入する可能性はある。EU に加入するには、ヨーロッパの国であるという地理的条件の他に、以下の3つの条件を満たさなければならない。第1は、政治的条件である。EU 条約2条に定められる、EU 諸価値の尊重しなければならない。第2は、経済的条件である。加入したら、域内市場に加わることになるため、そこで円滑に当該国が組み入れられるような経済力や制度をもっていなければならない。第3は、EU 法総体の受諾である。EU がこれまで採択してきた EU 措置、国際条約、EU 司法裁判所の判例法などアキ(acquis)を受け入れ、既存の EU 構成国と同じ EU 法が加盟候補国にも適用されなければならない。クロアチアは、これらの条件をすべて満たし、晴れて EU に加入した。

¹*脚注のインターネットサイトへの最終アクセス日は、2025年1月20日である。

クロアチア政治・経済概況については、在クロアチア日本国大使館が2023年に作成した PPT がある。
<https://www.hr.emb-japan.go.jp/documents-JP/croatian-economy-overview-jpn-2023-01.pdf>

EUには、多段階統合が取り入れられている。多段階統合とは、統合の速度が同じではなく、条件を満たした場合または望んだ場合にのみさらなる枠組に参加できるようになっている。多段階統合の1種である、先行統合は、EU構成国の一部が統合をさらに進めることを希望し、措置を採択することでなされる（EU条約20条、EU運営条約326条以下）。個々の措置ではなく、制度として多段階統合となっているものとして、経済通貨同盟（Economic Monetary Union, EMU）とシェンゲン圏がある。経済通貨同盟は、域内市場（人、物、サービス及び資本に自由移動が確立される国境のない領域）をより実質的に確保するために導入された。欧州中央銀行（ECB）が、金融政策分野の排他的権限を有し、単一通貨ユーロの発行量を決めている。経済通貨同盟に加入するために、一定の条件（物価の安定、インフレ率、金利、財政赤字、為替レートに関する条件）を満たさなければならない。イギリスはこれらの条件を満たすか否かにかかわらず、経済通貨同盟からオプトアウトしていた。クロアチアは、これらの一定の条件を満たしたとされ、2023年1月1日から経済通貨同盟に入り、ユーロを用いている。クロアチアより先に加入していた、ブルガリア、チェコ、ハンガリー、ポーランド、ルーマニアに先んじて経済通貨同盟の構成員になっている（なお、スウェーデンとデンマークも経済通貨同盟に入っていない）。これは、クロアチアの経済及び財政状況が安定している証左である。1999年発効のアムステルダム条約によりEU枠外で締結された国際協定である、シェンゲン協定及びシェンゲン実施協定がシェンゲン・アキとして、EU法の中に組み入れられた。シェンゲン圏では、原則的に国境コントロールが廃止される。それゆえ、シェンゲン圏の対外国境が重要な役割を担うことになる。そのため、国境警備に信頼がおけないEU構成国はシェンゲン圏に入ることができない。クロアチアは2023年1月1日よりシェンゲン圏に入っている。他方、ルーマニアやブルガリアはEUに先に加入していたが、シェンゲン圏に入ったのは、2025年1月1日からである。現在、シェンゲン圏に入っていない、EU構成国は、アイルランドとキプロスである。なお、EU構成国ではないが、シェンゲン圏に入っているのは、スイス、リヒテンシュタイン、ノルウェー及びアイスランドである。このようなことから、クロアチアがEU構成国として「優等生」と考えられる。

「優等生」という点からもう1つ指摘できることがある。EUには、EU構成国がEU法違反の行為を行ったときに欧州委員会がEU司法裁判所に提訴するという条約違反手続がある（EU運営条約258条以下）。EU司法裁判所は、毎年統計を公表しているが²、2019年から2023年の5年間で欧州委員会が条約違反手続に訴えたのは、クロアチアに対しては1件のみである。ブルガリアに対しては15件、ポーランドに対して14件、ハンガリーとポルトガルに対して12件、スペイン及びイタリアに対して11件となっている。

EUは欧州議会、欧州委員会、欧州首脳理事会、EU理事会、欧州中央銀行、EU司法裁判所、会計検査院というEU機関がある（EU条約13条参照）。その他に諮問機関や下部機関も存在する。EUの立法機関である、欧州議会は現在720人の議員から構成される（EU条約14条）。欧州議会議員は直接普通選挙で選出される。2024年から5年の任期で2024年6月に選挙が行われた³。欧州議会では、人口を加味しつつ、中小国に有利な形で議席が配分されている。クロアチアの議員は12人である。欧州議会では国ごとに着席するの

²CJEU, Annual Report 2023, Statistics concerning the judicial activity of the Court of Justice, see, 2019https://curia.europa.eu/jcms/upload/docs/application/pdf/2024-04/en_ra_2023_cour_stats_web_bat_22042024.pdf.

³EU MAG 「2024年欧州議会選挙の結果（概要）」2024年7月12日付、see, <https://eumag.jp/article/feature0724a/>.

ではなく、EU レベルで政治グループが形成されている。現在、クロアチア議員12人のうち6人が欧州人民党グループ (EPP)、4人が欧州社会民主進歩同盟グループ (S&D)、1人が欧州保守改革グループ (ECR)、1人が緑の党・欧州自由連盟グループ (Greens/EFA) となっている。欧州議会選挙の結果を受けて、欧州人民党 (EPP) の筆頭候補者であった von der Leyen 氏が欧州委員会委員長として選出された。2024年12月、2期目の von der Leyen 欧州委員会が発足した。欧州委員会は、欧州統合の推進者であり、EU 措置の提案を行い、また、EU 法の擁護者として、EU 法が順守されるように確保するという役割もある (EU 条約17条)。加えて、EU の対外代表の役割もある。欧州委員会は各国1名の委員、計27名の委員で構成されている。クロアチアの委員として、Dubravka Šuica が選出された。彼女は、von der Leyen 第1期は民主主義と人口事項の副委員長であり、第2期は、地中海問題を担当している⁴。欧州首脳理事会は、構成国の国家元首または政府の長並びに欧州首脳理事会議長及び欧州委員会委員長によって構成される (EU 条約15条)。2009年12月1日発効のリスボン条約により欧州首脳理事会に常任議長がおかれることになった。名前は似ているが、EU 理事会は、構成国における閣僚級の代表で構成される。議長国は輪番制となっている。クロアチアは、加入して初めて、2020年1月から6月末まで議長国を担当した。EU 司法裁判所の司法裁判所裁判官は各国1名、27名で構成されている。クロアチアからの裁判官は、Siniša Rodin である。ザグレブ大学の出身である。EU 司法裁判所には司法裁判所の裁判官と同じ資格と地位を有する法務官が11名いる。大国 (ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、ポーランド) からは常に1名、他の構成国からはローテーションで選ばれる。クロアチアの Tamara Čapeta が6年の任期で現在法務官を務めている。彼女はザグレブ大学の教授でもある。たとえば、最近では、野生動植物の保護の一貫としてのオオカミの狩猟の禁止に関する事件⁵や共通外交安全保障政策事項に関する司法裁判所の管轄権に関する事件⁶で法務官意見を提出している。一度、後述するように彼女の講演を聞き、お話しする機会があった。一般裁判所の裁判官は各国2名となっている。クロアチアからの裁判官は、2人の女性、Vesna Tomljenović と Tamara Perišin であり、2人ともザグレブ大学を卒業している。

III クロアチアと私

一橋大学には、外務省や裁判所等の職員の方が任期付きで一橋大学で教鞭をとられる制度がある。その中で外務省から嘉治美佐子先生が派遣されてこられた。一橋大学での任期を終了された後、クロアチアの日本国大使として、2019年5月24日から約3年間クロアチアの日本大使館に勤務された。私は、在外研究のため、2019年10月よりドイツのミュンスター大学に客員研究員として滞在していた。嘉治大使 (当時) より、メールを受け取り、クロアチアの首都ザグレブで日本 EU 協力に関するセミナーへの参加を打診された。同セミナーでは、日本と EU が共有する価値及び課題、日本と EU 間の経済連協協定 (Economic

⁴https://commission.europa.eu/about/organisation/college-commissioners/dubravka-suica_en.

⁵Case C-601/22 Umweltverband WWF Österreich and Others v Amt der Tiroler Landesregierung, Opinion of Advocate General Čapeta delivered on 18 January 2024, ECLI:EU:C:2024:62. 判決は、2024年7月11日。

⁶Case C-29/22 P and C-44/22 P, KS and KD v Council of the European Union and Others, Opinion of Advocate General Čapeta delivered on 23 November 2023, ECLI:EU:C:2023:901. 判決は、2024年9月11日。

Partnership Agreement、EPA)と戦略的パートナーシップ協定(Strategic Partnership Agreement、SPA)⁷、その地球規模課題(環境問題・気候変動等)が議論された⁸。同セミナーは、2019年11月19日にシンクタンク IMRO 主催で外務省が支援する形で実施された。日本と EU は、2013年4月より両協定の交渉を開始し、2018年7月17日に両協定に署名がなされた。EPA は、2019年2月1日に発効し、SPA は同日に暫定的適用が開始された。これらを受けて、テーマが EPA と SPA になったと考えられる。また、このセミナーがこの時期に開催されたのには理由がある。上述したように、2020年1月からクロアチアが初めて EU 理事会の議長国になることが決まっていた。そのための準備でもあった。このセミナーには、日本からは嘉治大使(当時)、パネリストとして、谷口智彦内閣官房参与/慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授(当時)、兒玉和夫欧州連合日本政府代表部大使(当時)と私が参加した。また、クロアチア側からサーニャ・ティシュマ I RMO 所長(当時)、ズラテフ駐クロアチア欧州委員会代表(当時)、マテ・グラニッチ大統領特別顧問(当時)及び環境保護団体の方々等が参加された。このセミナーの前日には、大使館の職員の方にザグレブ市内を案内していただき、このセミナーの次の日には、ザグレブ大学の EU 法研究者の Iris Goldner Lang 先生と Melita Carević 先生との会合をセッティングしていただいた。ザグレブ大学は、クロアチアで最大の国立大学であり、1699年に設立された非常に古い、歴史のある大学である。この大学から大統領など多くの要人が輩出されている。

在外研究から戻った後、Lang 先生からメールで連絡があり、一橋大学に来られることになった。その Lang 先生は当時ザグレブ大学法学部の国際交流長をされており、メールのやりとりを経て、一橋大学法学部と2022年12月に学部間学術交流協定を締結した。その後、Lang 先生は、2023年7月3日から約1週間、日本に滞在され、EU 法に関する講義・講演を3回された。先生の研究テーマの EU の移民・難民法であるので、それを中心に英語で講義・講演をしていただいた⁹。そのうちの1回は2023年7月5日に、GGR ブラウンバッグランチセミナーで「欧州連合における移民流入に関する最近の動向」と題して講演をいただいた¹⁰。Lang 先生の滞在期間中に数回懇談をし、クロアチアの事情についても知己を得た。

Lang 先生からのメールでザグレブ大学法学部の主催で EU 法セミナーがあると聞き、学術交流協定が締結されていることもあり、関係は双方向である方がいいと考え、2024年4月に2週間クロアチアに行くことにした。クロアチアのザグレブでは、大学が借りているアパートの1室を利用することができた。大学までは路面電車やバスに乗って通った。アパートの近くにスーパーマーケットやパン屋があり、便利であった。また、近くに公園があり、よく散歩した。クロアチアのこの EU 法セミナーは2018年より毎年ザグレブ大学により主催されていて、場所はドゥブロブニク(Dubrovnik)で開催されることになっている。

⁷中西優美子「(巻頭言) 日本・EU間の経済連携協定(EPA)と戦略的パートナーシップ協定(SPA)」

EU法研究 5号 信山社 2018年 1-12頁; Yumiko Nakanishi, "The Economic Partnership Agreement and the Strategic Partnership Agreement between the European Union and Japan from a Legal Perspective", in Abdelkhaleq Berramdane and Michel Trochu (dir.), Union européenne et protection des investissements, Bruylant, April 2021, pp. 175-193.

⁸在クロアチア日本大使館のサイト、<https://www.hr.emb-japan.go.jp/jp/2019/nikokukan-2019-11-irmo.html>.

⁹<https://www.law.hit-u.ac.jp/2023/07/information/5307/>.

¹⁰<https://ggr.hias.hit-u.ac.jp/2023/07/25/ggr-brown-bag-lunch-seminar-recent-development-related-to-the-migration-influx-in-the-european-union-2-2/>.

ザグレブからドゥブロブニクには飛行機で1時間ほどである。このセミナーは、EU法のジャンモネセミナーであり、4月23日から26日まで開催された¹¹。テーマは、「EUにおける権限：ネバーエンディングストーリー」というものであった。ザグレブ大学のLang先生の他に多くのEU法の先生、ポストクの研究者や他の国から来られたEU法の研究者、さらに、EU司法裁判所のクロアチアの裁判官Siniša Rodin及び法務官Tamara Čapeta、ルクセンブルク大学教授Herwig Hofmannなど、錚々たるメンバーが集まった。テーマが自分の研究テーマである権限であったことからセミナーにおいて積極的に質問とコメントを行った。宿泊した場所がホテル機能も持つ、ドゥブロブニク大学の宿舎で、3日間の合宿中、EU法研究者と意見交換をすることができて、自分にとっては至福の時間を過ごした。この宿泊施設を兼ね備えた大学の建物はEUからのファンディングで建設されている。ドゥブロブニクは、宮崎駿監督の映画『魔女の宅急便』のイメージの場所となっており、城壁に囲まれた旧市街は世界遺産になっている。自由時間に旧市街にも足を延ばしたが、非常に美しい場所であった。Rodin裁判官もČapeta法務官もザグレブ大学教授であり、そこから任命された。また、ザグレブ大学法学部にはLang先生の他、EU法（例えば、基本権、環境など）を細かな専門を担当する先生がおられ、スタッフの数も多い。私は、4月29日に「循環経済とEU市民(Circular Economy and EU Citizens)」と題してJean Monnet客員講義シリーズで講義を行った。講義には、駐クロアチア大使磯正人氏と専門調査員の舟木氏に参加していただいた。それに先立つ26日に公邸に招かれて夕食をごちそうになった。また、4月29日には、マーストリヒト討論がライブ中継されて、授業の一貫として位置づけられていた。2024年6月に欧州議会選挙が予定されており、若者への選挙意識を高めるという目的もあり、マーストリヒト討論¹²が開催された。そこでは、2024年6月の欧州議会選挙の筆頭候補者(Spitzenkandidaten, leading candidates)が政策を語り、討論するというものであり、最後にはどの候補者が説得力があったかという結果がでる仕組みになっていた。参加者は、若者に限定されているものとのことであった。

IV おわりに

EUの授業ではクロアチアのことには少し触れてもクロアチア自体はよく知らなかったが、2回、特に2024年4月の滞在は2週間ということもあり、クロアチアをよく知ることができた。東ヨーロッパの国としてはクロアチアが初めての訪問であった。上述したように、ザグレブ大学出身の先鋭が欧州委員会やEU司法裁判所に送られている。クロアチアは、EUからファンドを受け取っていることをザグレブやドゥブロブニクの至るところで感じると同時に、クロアチアがEU構成国としてEU及びEU法の発展に寄与しようとする意気込みを感じた。

嘉治元大使の仲介で一橋大学に来られた、駐日クロアチア大使Dražen HRASTIĆと昼食を食べる機会があり、名刺交換をした。その後、クロアチアが開催するコンサートに招待された。2024年10月22日に駐日EU代表部で行われた、クロアチア人と日本人のミュージシャン(Elis LOVRIĆ and Utako TOYAMA)のコラボのコンサートがあるというので参加した。心が洗われる音楽だった。

この駐日EU代表部ではコンサート後、立食パーティがあり、関係者と名刺交換を行った。そのうちの一人がルーマニアの外交官であった。ルーマニアは12月が建国記念日とい

¹¹https://www.pravo.unizg.hr/en/ejp/jean_monnet_seminar.

¹²See, <https://maastrichtdebate.eu/>.

うことでホテル・オークラ東京においてレセプションに招待された。ここではルーマニアに住む日本人と日本に興味をもつルーマニア人のインタビューから構成されるルーマニアの紹介ビデオを見た。このレセプションでは、EU 構成国として誇りあるルーマニアを感じた。

EU 加盟候補国アルバニアの外交官とも名刺交換し、その後、レセプションに12月に招待されたが、論文執筆期限が迫っており、残念ながら参加できなかったが、EU と EU 構成国、EU 加盟候補国とのつながりを日本でも感じる。